昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和五十一年十月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第二十八巻　第十号　（通三二八号）

目次

63.8.22

社会の根底的改造……近角常観……(1)
絶対他力と体験(一)……池山栄吉……(5)
――衆生の苦悩――
宗教に何を求むべきか……山本晋道……(12)
念仏詩抄……木村無相……(17)
めぐまれた尊いいのち……花田正夫……(20)

社会の根底的改造

近角常観

我国現時（明治三十六年頃）の社会ほど不真面目な時代はなかるべし。政治界にあれ、実業界にあれ、はた宗教界にあれ、腐敗に腐敗を重ね、姑息に姑息を加え、表面は一見厳然たる形式を備うるが如きも、内心毫も操持するところなく、その行動云為も真摯の気風の微すべき者一つもなし。ただ外界、境遇の変化に従うて飄々乎として身を世上風波の間に処する徒のみ。極言すれば我国社会の腐敗の原理は、その社会を形成するところの各分子が根底的に腐敗せるにあり。各社会の精神の委摩枯死せるにあり、結果を追うて主義を顧みざるにあり。ことに道徳上において厳格なる実行をなして人をして秋霜烈日の感あらしむる如きは逐に毫も見るべからざんとす。或人は我国将来における経済的破産を憂う、しかうして吾人は精神的破産の怒濤すでに国民の頭上に澎湃（ほうはい）たるを見てうたた寒心に堪えざるものあり。

言うなかれ、吾人をもって奇矯の言を弄して世を罵るものなりと。また言うなかれ厳粛の思想をもって世上を悲観するものなりと。すべからく襟を正しくして各社会の現状を審察せよ、政治家は何がために政治を為す、その位を得るがためか、その権を得るがためか、いやしくもその堅持する主義を実行し、その目的済世利民にありとせば手段として、位を得、権を獲取せんとするもとより其所なり。然れどもその位を得んとする手段において、その権を獲取する順序においてすでにすでに自らその主義を傷け、その所信に反背せる行為に出ずるもの滔々としてみなこれなり。

この如くして権位を得て主義を行わむという、矛盾も亦甚だしきかな。みなこれ権位そのものを目的とするもの、かえってその主義を犠牲にすることなしと云うべからず。この如き政治家をもって組織せられたる政治界ははたして真面目なる政治界と云うべきか、真摯なる行動、毅然たる操行を望み得べきか。吾人はその表面の正々堂々たるにも似ず、その精神の腐敗堕落せる今日の如き激しきを知らざるなり。

宗教界のこと、吾人深くこれを言うに忍びざるなり。宗教の真髄は信仰なり。これを形式に実現するもの厳然たる宗派たり、教会たり。而して行為の上にあらわるるや厳格なる道徳となり、教会の救済となり、人格の修養となり、品性の陶冶となる。もし極端に言わしめば、現時我国の宗教界は真面目の意味において何れの所にその面影を認め得べきか。天下滔々として宗教を憂え、道徳を唱う。これを憂え、これを唱うる人、すでに自からその真面目を獲取せず、今日の宗教界は盲人の相導いて断橋の下に落ちるが如し、宗教界の混乱けだし今日の如き甚だしきは無し。吾人はたしかに将来において希望の光明赫々たるものあるを信ずるものなり。吾人は信念の地下に磅礴（はうばく）たるものあるを感ずるものなり。然れども未だ東方の微白を示さざるなり。万人闇中に彷徨してその帰する所を知らざるなり。苦しむべし、憂うべし、天に叫ぶべし、地に泣くべし。最も神聖なるべき宗教が最も腐敗し、最も光明あるべき教界が暗澹たること、恐らくは今日の如くはげしきを知らざるなり。

又この如き政治、若しくばこの如き宗教を評する、世の所謂、教育家、学者なるものを見るに毫も感服すべき点を発見せず、彼等は他を評することを知るも、自ら行うことを知らざるなり。而してその本領たる教育及び学問の事にありて、その主義の確立せざる、その位置のために汲々たる、その所信の堅実ならざる、道徳を厳守せざる、社会に感化なき何ぞ他の政治界、宗教界とえらぶところがある。これを要するに我国現時の社会は、政治となく、宗教となく、教育となく、学問となく、真面目の気風蕩然として地を拂うてむなし。我国現時の患じつにここに在り。

然らば如何にしてこの社会を改造すべきか。曰く他なしこれを根底より改造することなり。根底より改造すと云うは決して一時の運動によりて、消極的に破壊するの謂にあらず、徹頭徹尾健全なる積極的方針をもって、社会の各分子を根底より改造することなり。単に形式の変更にあらずして実質を改造することなり。

近世医学の学理上に一新紀元を開きたるドイツ解剖学の泰斗ウイルヒョウ博士は、細胞説を創唱し、身体は個々の細胞の組織より成るものにして、従来身体各部の病と称したる所のものは、決して各部の病に非ずして、これを組織する細胞自身の病たることを明らかにせり。氏のこの発明は医学界上一大光明を放ちたり、而してただに医学界のみに貢献せしにあらずして、直ちに氏は自らこれを政治上の原理に応用し、細胞をもって各個人とし、身体をもって国

家とし、諸機官の組織をもって社会各部の組織と比較し、氏は自ら政界において一方の雄将として医学界における如く、昨年隠退するまでは、又政界の明星たりき。今もし氏の思想を応用し来りて、我国現時の社会における病根たるものを察するに、政治、宗教、教育、学者、所謂各部の病なるものは、実に各部を組織する所の各個の細胞自身が病めるなり、腐敗せるなり、パチルスを宿せるなり。もしそれ細胞分裂して、その各部、機官に繁殖すとせんか、益々その腐敗を伝染し、そのパチルスを遺伝し、逐に停止する所なからんとす。すでに腐蝕その極に達する細胞はまた如何ともすべからず、これ特に健全なる新細胞をもって根底より改造せざるべからざる所以なり。

従来世人の社会上の改善を策するもの、多くは形式の改良にして実質の改良にあらず、組織の改良にして分子の改良にあらざるなり。これ大いに不可なり。なお彼の身体各部の病なるものは、細胞自身の病なることを悟らざるが如し。而してその腐敗せる細胞を用いて、しばしば組織を変更し、形式を改むるといえども、何等の功益なき、まことにそのところなり。見よ政界においてしばしば政党の改造を謀り、内閣の更迭を行うとも単に形式の変更に止りて毫もその細胞、実質の改造を見ず、宗教界また同じく、多年紛々擾々として常に事絶ゆるなしといえども、畢竟形式、組織を改良するのみにして、その実質たる各個の細胞にいたりては毫も変化を見ず、腐敗せるものは如何にするも腐敗せるものなり。これを縦に列するも、これを横に並ぶるも、これを方形に組織するも、これを円形に組織するも、細胞の改造せられざる限りは、真面目の意味における改善は覚束なし。これ吾人が根底的の社会改造を主張するゆえんなり。

然らば如何にして健全なる分子を作り、如何にして新細胞を繁殖し、第二の政界、第二の教会を組織すべき根底を形造るべきや。これ実に根本的の実際問題なり。余は断言せん。彼の栄ゆるものをして栄えしめよ、砂上に築かれたる楼閣はついにその久しきを保つべからず。彼の腐敗するものをして腐敗せしめよ、腐敗極まりて始めて清明の天地は開かるべし。唯吾人が現時の急務とするもの、生命とするものは、新進精鋭の青年が、かの腐敗に感染せず、彼の虚栄に誘惑せられず、堅実なる志操を有し、清浄なる社会を形造り、歩一歩、その立脚地を定め、その地盤を固くせよ。大盤石上に各個堅固なる煉瓦石をもって着々積み立てられたる殿堂は世上の風波をあざけり、悪魔の襲来を笑殺せん。而してこの如き堅牢なる地盤、立脚地とは果して何ぞや。曰く宗教の信仰これなり。

彼の仏陀を信ずる者は、中心居然として仏陀の聖意に安住する者、天下矛を奮うて彼に向うも、彼は泰然としてその所信に殉ずべし。彼の仏陀を信ずる者は満身粛然として仏陀の至誠に感泣するもの、天下の富をもって彼を誘うも彼は森厳にして毫も犯さるるなかるべし。彼仏陀を信ずる者は悉然として仏陀の大勇猛心によりて激励せられたるもの、大火三千世界に満つるも、彼は猛然として進むべし。かの仏陀を信ずる者は油然として仏陀の大慈悲心によりて鎔融せられたるもの、百万の怨敵毒炎を吹きて彼に向うも、彼は哀々悲愍の涙を垂れて忽ち春風平和の世界を開顕すべし。

嗚、信仰なる哉、信仰なる哉。信仰は従容動かざる大地の如く、信仰は群生を湿すこと大水の如く、信仰は罪悪を焼くこと大火の如し。言う勿れ、吾人を以て徒らに理想的の空言を為すものなりと。見よ古来の開宗者は実に燎原の一点火にして遂に信仰をもって社会の根本的改造を実現せし者にあらずや。吾人はこの信仰の霊火を以て彼の腐敗せる社会的細胞に宿れるバチルスを焼き清め、仏陀の生命を宿せる個々の新細胞をもって社会を根底的に改造せんと欲するものなり。

『信仰問題十四章より』

明聖君に贈る

（長歌）

柳瀬留治

念佛者は長生すといふ。生き悩む業のことごと、
み恵みに　救ひとられて　安らかに　生き得る故ぞも
病み老いし　わが明聖よ　生きなづむ業のことごと
み佛に任せまつりて　さめざめと　念仏せさせ　我
もともに称へ申して生きづきゆかむ

昭和五十一年七月

病臥考

東村山　久保田明聖

結局は独り逝く身と思ひつつ夜更寂しも物の音なし
身寄りなく一人寂しく逝くわれが思ひせつなく眠られぬ夜半
どうにでもなれと捨身になれぬ故思ひなやめり春の夜の更け
乞食の暮しにひとし然りながら指摘されれば腹の立ちくる

絶対他力と体験（一）

――衆生の苦悩――

池山栄吉

苦に逼られて

私共はいつも楽を追っている、そしていつも苦に逼られている。胸まで水にひたりながら、かがんで水を飲まうとすると、スーッと波がひいて行って、追う口もとに返って来ない。頭上にしだれかかる満朶（まんだ）の木實をとろうとすると、ドッと風が吹いてきて、枝をたわめて手がとどかない。飢渇になやむタンタルスは、そのまま私達のことではないか。

樹の上で流目する美女にあこがれて、刀のような鋭い葉に肉を割かれ、筋を断たれて、ようよう樹頭に昇ったとおもえば、彼の美女はいつのまにか下に居て、嬌態（しな）をつくして喚んでいる。またもや全身をつんざかれて、下に降りれば上にいる。刀葉林の罪人は、現に私達のことではないか。

求めてやまぬ

私達は求めてやまないものだ。隴（ろう）を得て蜀（しょく）を望むとは、すでに増長を極めた沙汰だが、蜀を得ればまた何かを望むにきまってる。

日吉丸が木下藤吉郎となり、羽柴秀吉となり、豊臣となり、太閤となって、仮りに其上の出世を望まなかったとしても、少くとも、わが亡き後に世嗣秀頼が、よく現状を維持することが出来て、諸国諸大名の牛耳を取って行けるようと望んだに違いない。

それからそれと

何か会でもあって御馳走が出るとする。西洋料理ならば通例まずスープが出る。次にはフライの出るのがきまりだ。さてその次には、シチューだのオムレツだの、さてはカツレツ、ビフテキなど、だんだん出たあとで、大抵腹が一杯になった時分、最後にサラダを台としたさっぱりしたものが出る。それから今度は後餐に入って、菓子が出る、コーヒーが出る、果物が出る。無論、ビール、ブドー酒、シャンペンなど、色々の酒は初めから出ている。

日本料理でも、それぞれ凡そ順序があって、なかなか沢山の品数が出る。上等の支那料理などになると、それが一層多いそうだ。

そもそも料理の献立は、要するに食欲の欲求を連続的に具象したもので、人々が食事に際して、それからそれと求めて行く有様は、それで明らかに看取される。

さていよいよ御馳走がすんで、食欲の欲求はひとまずかたがついたと思うと、今度はさらに、囲碁、将棋、トランプ、玉突、音楽、舞踏、曰く何、曰く何と、さまざまな娯楽的欲求があとからあとから起ってくる。

そしてそれをみたしつつゆく間にも、機会さえあれば抜目なく、愛を求め、利を求め、勢を求め、その他あらゆる方面で、いやしくも自己発展に益することは、悉く求めることを忘れない、いやはや実に忙しいのは私達の生活だ。

断えぬ不足

私達はいつも何か不足を感じつつあるものだ。

心にかかる雲もなく、晴れた空に月を望むような、すっきりとした好い気分にひたる刹那もないではないが、あわれそれがいつまで続こう。上加減の湯につかっていると、いかにも好い気分であるが、しばらくするとのぼせてきて好いと思った心持もだんだんわるくなってくる。

好んでは常住を求め、厭（あ）いては変化を求める。万法は無常で変化はまぬかれない。変化は必然であるが、必ずしも希望にそわない。

常住を求めて得ず、変化もまた意の如くにならない。そこに私達の不満がある。

思うようには

よしや多少の労がともなうにしても、必ず望みがかなう

とならば、不足のおこることもあるまい。池をかいほして魚を捕るような、熟した木實を竿で打ちおとすような、目指すところへ半日の遠足を試みるような、それはむしろ趣味ある楽しいことであろう。

しかし世の中は思うようにはならぬ。私達は一切を思いのままにしたいと望む、物に対しても、人に対しても、はた自分自身に対しても。

もっともいくら望んでも、到底かないそうもないことは始めからあきらめて、あえて望みもしないようだが、必ずしも不可能でないと認められる限りは、成就するよう望んでやまない。が、いろいろ自然、もしくは人為の障碍があって、一々思う通りにははこばない。

累反射

とりわけ自分と人とに対する場合には、相手を無理に強力をもって圧倒するのでない限り、心と心との相対になる。

その関係は丁度、鏡と鏡とむかい合わせたようなもので、向うの姿がこちらへうつると同時に、こちらの姿が向うへうつるばかりでない。向うにうつったこちらの姿が、更にこちらへうつると同時に、こちらへうつった向うの姿が、更に向うにうつる。そしてその姿がこちらへうつり、そのこちらへうつった姿が、また更に向うへうつると云った風に、順次幾多の累反射を影現する。

復写眞

累反射の結果、自然に出来あがるのは一種の復写真だ。銘々の胸にかけてる人形箱から、仏ばかりが飛び出したなら、それは当然仏が現像されよう。しかし人間は打算的だ。悪貨は良貨を駆逐する。よし一方から仏が出たとしても、他の一方から鬼が出れば、仏の方は引込んでしまう。仏の顔も三度という、代って出るのは矢張り鬼だ。

いわんや私達の胸の中には、仏の面だけは用意してあるが、活きてるものは鬼ばかり、たまに人間らしい面を被ってるのがあればまだしものこと、われひとともにお互に、相手の出方をうかがってるという始末だから、出来る写真にろくなものは滅多とない。

末の松山

もしも、私達が真実の心をもって人にむかうことが出来るなら人も清浄の心をもってこたえてくれよう。が、悲しいかな、私達にはその持合せがない。一時表面をごまかしても、仮面はついにはがれるときがある。

徹頭徹尾自己中心の立場に陣取って、しかも奔放な愛憎痴慢の乗ずる所となり、とかくわが田に水を引きたがる虚仮不実が、私達の本来の面目であってみれば、それでどうして人との間に恒久の情誼がかわされよう。利害の相容れる間こそ、膠漆（こうしつ）の交りも続こうが、一朝それが相反するようになれば、打ってかわって怨敵の間柄ともなりかねない。

（道成寺、鱗が肌のぬぎじまい）

反作用

自分と相手と同じ大きさの舟に乗ってると仮定して、自分が相手の舟を押せば、相手の舟の押し退けられるだけ、それだけ自分の舟も後にもどる。自分が相手の舟を引けば、相手の舟が引寄せられるだけ、それだけ自分の舟も前に乗り出す。作用反作用の運動の法則は不実で押しへだて利害で寄り近づく、人の心的交感にもあてはまる。それが人生五分五分の交際というもの、なんとすこぶる詩的の気韻に欠けた、あさましい現象ではないか。

恨綿々

たまたま親子兄弟、夫婦親友などの間に、或美しい情意の投合が見出されるにしても、その不変性は必ずしも保証されない。

のみならず困ったことには、もともと生物同士の間柄だ「風葉の身たもちがたく、草露のいのち消えやすし」何時死王の手にへだてられるかわかったものでない。無惨にも一方が欠けてしまうと、一方はその親愛の対象を失って、糸の切れた紙鳶のよう、やるせない情緒のみが綿々としてのこる。

「いたましいかな、まのあたり言葉を交じえし芝蘭（しらん）のとも、いきとどまりぬれば遠く送り、あわれなるかな、まさしく契りを結びし断金のむつび、魂去りぬればひとり悲しむ」

「ひとりは死し、ひとりは生じ、たがいに哀愍し、恩愛思慕して憂念結縛し、心意痛着してたがいにあい顧恋す。日をきわめ歳をおえてとけやむこともあることなし」

こうした惨劇は人生到る処で演出されて、誰も彼もその衝（しょう）にあたらずにすますことは出来ない。

かねての覚悟はどこへやら

生者必滅会者定離とは、誰しも心得顔でいることだが、いよいよほんとに自分が死ぬか、最愛のものが死ぬかという段になると、かねての覚悟はどこへやら、諦めていると思っていたことが、一向諦められていなかったのか、今更のように周章して、四方八方にげ路を求めても、百計つきた上は、万斛の恨みを呑んで、死魔のなすがままになるよりほかしかたがない。実にたまらなくなさけないものは人の世だ。

欲求の無限性

この事例に照らして見てもよくわかる。私達の欲求は、物に対すると、人に対すると、はた自分自身に対するとを問わず、本来無限、無窮の展開性をもっている。

生命ばかりに限らない、その外のものでも、いやしくも不足を満たすに足るものは、一つ残らず欲しいのが私達の性分なのだが、そうみながみな得られないから、仕方なしにあきらめるとしているだけのことで、本統にあきらめられているのではない。

「煩悩深くして底なし、生死の海ほとりなし」とは、欲求の無限性から必然的に約束される私達の実相を、すこしの誇張もなく道破した金言だ。

レルナの水蛇（ヒドラ）

対人関係の思うようにならないのも、自然の障害を除いては、つまりは自分の心のあつかいが思うようにならないのが主因で、一体自分の心ほどあつかいにくいものはない。

諸の善をしなくてはならぬ、諸の悪をしてはならない、とは百も承知をしていながら、持ったが病のわがままは、なかなか云うことをきいてくれない。とかく自分に都合のよいことばかりしたがる。抑えれば抑えるほどますます反発する。

一つの首を切れば二つになり、二つ切れば四つになる、切れば切るほど倍になる、レルナの沼に棲んだという多頭のヒドラこそ、私達の根性そのままの象徴だ。

迷から迷へ

悪に悪を重ね、迷いから迷いに入って行く。それは私達の持前から出てくる当然の帰結だ。私達は気にかけようが

かけまいが、このなりゆきを如何ともすることは出来ない。泰山をわきばさんで北海をこえるのが可能であっても、心を制し身をただすのは不可能だ。どんなに踏んばったところで、外に賢善精進の相を現じて、内に虚仮をいたく型から出ることは出来ない。

「自分自身と戦うのが一番むつかしい戦で、自分自身に打ち勝つのが一番見事な勝利だ」というが、果してその言葉通り行っていける人があれば、それはもう凡夫じゃない、煩悩を断じ尽して悟りを開いたもの、仏そのものなのだ。

究竟の棲家

欲求は大海の浪だ。一つすぎるとまた一つ、それからそれとしきりなく起ってくる。一一の欲求をみたそうとするのは、底のない袋にものを盛るようなものだ。入れても入れても際限がない、のみならず、入れるものすら獲られないことが多い。

生命のあらんかぎり、終にみたされるときのない欲求を追って行くのが私達の生活だ。そして終にどうともしてみようのない、強烈な欲求につかまったが最後、そこで行詰ってしまうのが私達のさだめだ。絶望の淵は私達の究竟の棲家なのだ。

「今この娑婆界はたのしみとすべきことなし。輪王の位も七宝久しからず、天上の楽みも五衰はやく来る。乃至有頂天も輪廻期なし。いわんや余の世人をや。事と願とたがい、楽しみと苦しみと倶なり、富める者未だ必ずしも寿ながからず、寿なるもの未だ必ずしも富まず。或は昨は富みて今は貧となり、或は朝に生れて暮には死しぬ。故に経には出息は入息を待たず、入息は出息を待たずといえり。ただ眼前にたのしみ去りて悲しみ来るのみならず、また命終に臨みて、罪に随いて苦しみに堕つ」（往生要集）

解脱の道、其一

このたまらない境涯から脱れるにはどうしたものだろうさし当り二つの道があるように見える。絶大の力を具足して、あらん限りの欲求を片端からみたして行くのが其一。心を無漏（むろ）清浄にたもって、穢らわしい欲求そのものが、てんで起って来ないようにするのが其二だ。

前者は、例えば盗賊の入るに任かせて、望み次第の財宝を取らせようというもの。後者は盗賊の入るすきまのないように、厳重に心の門（かんぬき）をかけようというのだ。力に限りがあっては、無限の欲求の相手は出来ない。全

智全能の主体とならない限り、第一の道はたどれないのは分りきったことだ。秦の始皇や、漢の武帝が不老長寿の薬をもとめさせたなどは、正気の沙汰とは思われない話のようだが、世間にはこれに似た図が乏しくないから驚く。自分は死なぬものかのように、思ってるとしか思われない振舞いのある人は皆それだ。現に財産があって自由のきく人々には、知らず識らずここに出る傾向が特に多いかとおもわれる。

解脱の道、其二

第二の道は、奮発次第でたどれそうにも思えるが、其実むつかしさは前のとおなじだ。

世をいとい山に入る人山にてもなおうきときはいずち行くらん、心が穢れに染まないようと、かたがた錠をおろしたところで、もともと私達の心そのものが、煩悩のかたまりときているのだから仕方がない。煩悩のかたまりから煩悩を取って除けようというのは、瓦を玉に磨きあげようとする愚かさとえらばない。泥でよごれた下駄を泥水で洗っても、とてもより奇麗になりっこはない。

むかしからこの道を真剣になってたどろうとした人は、甚だ少くないものであったらしいが「恩愛はなはだ断ち難く、生死はなはだつきがたし」で、大方は、早晩破滅の転機に逢着して、狂乱の押寄せるような欲求に翻弄され、岳山の崩れかかるような欲求の下敷になって、紛砕されてしまって、無事に到達する者は少なかったに違いない。

身のなる果

いわんやさほどの奮発もなく、うろうろしていたり、又はそんな問題は一向念頭にも浮かばないで、うっかりぼんやりくらしていた人が、みたされない強烈な欲求につきあたって、鷲につかまれた雀、蛇ににらまれた蛙のように、さっぱり動きがとれなくなると、急にあたふたして藻掻き苦しみに苦しむ。が、今更どうにも追いつく話でない。そんならここで百年目と観念して、ほんとにあきらめることが出来るかというと、それも出来ない。

「かなしいかなや人の身の、なきなぐさめを尋ねわび、道なき森にわけいりて、などなき道をもとむらん」

いかんともして見ようのない窮境におちいりながら、あきらめることすら出来ないとは、何たる悲惨ななりゆきだろう。「いたるところ余のたのしみなし、ただ愁歎の声のみをきく」そしてこれは他人事でない、現に私達の身のなるはてとしたならば、恐ろしさ、はかなさ、とてもじっとして居られるわけのものでない。

（続く）

宗教に何を求む可きか

山本晋道

「留守中お訪ね下さったそうで失礼しました。どんな御用でしょうか、遠慮なく仰言って下さい」と客人に申した。中年の婦人で、子供を膝に抱えて見るからに辛労にやつれている。

「先生、私に仏様のお話をお聞かせ下さい。私は一体どうしたらいいのでしょうか……」

何か深い事情があって思い余って訪ねて来られたお方らしいが、どうも言われることばがハッキリしない。復雑な人生の業縁のもつれの中に、身も心も疲れ果てて居られるらしいこの婦人と対座していると、私もおごそかな人生の相にふれて、心をひきしめられる思いがするのであった。思い乱れたこの婦人はつじつまの合わぬこの短い一言の中に、口で言いあらわし得ないほどの復雑な思いをこめて私の前に今にも泣き出しそうな様子であった。

私は答えた。「何か思い余って、切羽つまった立場にいられることは私にもよくわかります。然し奥さん、ただ漠然と、仏様のお慈悲を聞かせてくれと、たったそれだけ言われてもお答えのしようがないのです。

あなたは一体何を求めてこられたのです。仏様のお慈悲が何故聞きたいのです。あなたがただ漠然と仏様のお慈悲を聞かせてくれと、たったそれだけ云われても、私はお話し様もないのです。あなたは一体何を求めてこられたのです。仏様のお慈悲が何故聞きたいのです。お慈悲について話せとあればお話出来ぬこともありませんが、あなたがただ漠然とお聞きになっても、それでは靴の上からかゆい所をかく様で、間に合わぬかと思います。仏様のお慈悲は、自分を離れてあるものでなくて、自分の苦悩の中にこそ、迷うてこの世に生き、迷うてかの世に流転してゆく私あるが故にこそ、御成就せられた救いの道でありますから、お慈悲なくては生きられぬ自分の姿がはっきりしなくては、ただお慈悲だけが自分と離れて有難い筈はありません。無論、救うて下さるお慈悲の有難さがわかり、救うて頂かね

ばならぬ大変な自分がわかるのは同時ではありますけれども、自分を取りおとして、お慈悲だけつかんで慰められようとするのはいけません。我身にひきあてて、しみじみと喜べるお慈悲でないと、宙に浮きます。それでは厳かなこの人生に力強く生きる力とならず、従って永劫の救いになりません。

どんな事情の中に居られるのですか。何にぶち当って今悶えて居られるのですか。何故にお慈悲なしには生きられぬように切迫して居られるのですか。今痛んでいる問題、今苦しんでいる点をはっきりさせて下さい。そうなったわけ、それに対するあなたの考え方、それをどう解決しようとしていられるか、あなたの決心をありのままに聞かせて下さい。愚痴も、怒りも、貪欲も、あさましいお心の乱れも、ここでは恥ずかしがられる必要はありません。何もかもハッキリと見届けていて下さる親さまのお光の中に、卒直に打ち出して、そうしたあなたを如来は如何にあわれみ如何に救わんとして居られるかを、あなたの涙の一滴々々を通してお聞かせ下さいませ」

婦人ははらはらとと落涙して、いつまでも答がない。云うべくあまりにもつれているいきさつか、それとも婦人の頭は乱れきって考えをまとめる力を失っていられるか。

私はそこでさらに言った。

「容態を言わずに突然医者の前に出て薬をくれと言われても、薬の出しようがありません。責任のある医者ほどうかうかと薬は出しません。痛みの原因をつきとめて、根本的に治療したいと思っている医者ほど、好い加減な、一時のがれの薬は出せぬでしょう。心の痛みも同様です。表面に現れた症状によって、よって来る深い病の根元をつきとめて、根本的に問題に処する力をあたえようとするが宗教です。無明業障の恐ろしい病にはたとめざめ、つきあたって、これを如何にせんと立ちあがって来る所に、如来のご苦労の誰がためであったかを喜ぶ手がかりがありましょう。

先程申しましたように、あなたのように、何も事情を言わずに、ただ私にお慈悲の話をせよと云われても、何とも申しあげられません。あなた自身の過去、現在、未来の生き方が問題にならずに、ただ宗教の救いだけを聞かせよと仰せられても一寸困ります。

こう申しましても私は決してあなたの人に言われぬお家庭の事情を好んで聞きたいのでありません、あなたもそんなことは出来るだけつつしんでおかるべきことでしょう。

けれど今あなたは道を求めてお出になった、道を求めて歩かれるあなたの根本的な立場をはっきり伺っておいて、道を問題とする前に「道を求める立場」そのものをはっきりしておくことが大切かと思います。切羽つまって居られるらしいあなたを前にして、これは余りに冷たい、理屈になりすぎると思われましょうが、切羽つまった時ほど、人間は落着いて自分の動きを反省する必要があります。疲れはてて居られる貴方に、これからはっきりと腹をすえて立ち上って頂くためには、お慈悲の方を向いて、幻を追うて居られるかも知れぬあなたに、根本的に自分の生き方を振りかえって頂き、今の自分のすがたを見直して、一度心の底から驚いて頂きたいと思うのです」

婦人はやや暫くして、ぽつぽつ語られた。私はその内容はさし控えますが、私がお答えした要点を略記しよう。

第一に、この人は宗教の救いに対して考え方が不行き届きの様である。現在の苦悩をお慈悲を聞いてまぎらしたいらしい。自分の痛い所にはさわらぬ様に、問題の根元をはっきりつきとめずに、如来のお慈悲を聞いて、救われたという特別の、さらっとした苦悩のない、唯有難いと何もかも諦められて辛抱の出来るような、都合のよい世界に出たいらしい。

これに対して私は手きびしく答えた。宗教は膏薬ではない、痛い所の外から、そっと如来のお慈悲という膏薬を貼って、其の場しのぎに何とかごまかすことではない。

どこどこまでも見捨てずに、あたたかく抱いて下さるお慈悲であると共に、彌陀たのむより外に生きようのないあさましい恐ろしい私であることをはっきりとめざめさせて、弁解も愚痴も怒りも外に向かって言えた私でないことをつきつめて、眼をあけて下さる外科手術であるのです。人生のおごそかな、悲しいすがたに眼をあけようとせず、あやまりはてるより外に生き方のない自分を見る眼はつむっておいて、唯有難いお慈悲といって、自分にも人生にも眼をつむっているのは恐ろしい間違いです。

宗教の救いは、何もかも有難いと言う一色に世界が見えてきて、何もかも諦められるような、すっきりした人間ばなれのしたことになるのでないのです。

救われるとは、おごそかに内なる魂が眼を開けることです。心の眼をあけて自分とまわりを見直して生きて行くということである。信心を頂くとは、ある一面から言えば、このような眼をあけて頂くことです。如来が信心の智慧となって私の内にあらわれて下さり、眼をあけて下さるのである。

救われたからとて、柳は緑、花は紅である。悲しいことはやっぱり悲しい、嬉しいことはやっぱり嬉しい。切れば血の出る煩悩具足の私自身に何変りようもない。然し、かかる私の内に我ならざるものが来って我を生かして下さるのです。この如来の聖なる生命をうけてくらすのです。ここでは、変らぬままの私の上に、我ならぬ光がさす、そし

て今まで見落していたことの数々が照し出される。そこで御恩が知らされる。御恩を見落していたので愚痴と瞋恚と貪欲の中に住んでいたものが、限りない御恩のまっただ中に生かされている自分であることに気付き始めるのです。

御恩に気づかせて下さる光は同時に自分を照し出して下さる。自分の実価を知らずに高あがりして、人の足許ばかり見ていつも三毒の煩悩に狂うていた人間が、自分の地獄一定の相に驚いて、慚愧しながら生かされて行き始める姿ほどほほえましいものはない。

かくて信心とは貼りつけ膏薬ではない、中からはっきり解決する道である。眼をあけて見直させる道である。如何ほど痛かろうと、都合が悪かろうと、痛みの原因、もつれの原因を人間そのものの惑業苦の実相の中にまで突きつめて、問題のよって来る所の深さと厳かさにめざめさせるのである。

ここに人の問題が私の問題となり、私の姿が人の姿となる。一切衆生は同悲同歎しつつ、もろともに相携えて、大悲を仰ぐより外に道なき常没常流転の身でしかない。そしてかかる業深き者同志が、宿世余程深い因縁があったればこそ、こうして現世でもつれあって業をさらしあって生きて行くのであろうよと見直して来ると、単なる好き嫌いで五分五分の角突き合わせているお互の間にほほえましいなつかしい世界がほのかに味われ始めて来るのです。

かくて求道の第一歩は、お慈悲を膏薬につかわずに、我が身わが心をお光の中に投げ出して、自己を発見し、仏を発見させて頂く所に救いの世界がひろがる。

今苦悩しているから救いという楽な世界に逃れることでない。所詮この婆婆は逃れ様のない、四苦八苦の世でしかない。救われるとは苦悩のない行ないすました別世界に出ることではなくて、苦悩に処して、いじけず、ひがまず、泣く時は凡夫らしく泣きながら、泣いても泣いても曇らぬような深い心の光一つを頂いて生かされるのである。

私共の単なる理性的反省位で知られる自分ではないけれども、この私を照し、この私を私に知らしめて私を救うお慈悲であるのに、私を照し出す光としてのお慈悲を仰がずに単にお慈悲に甘えようとする事は心せねばなりません。

第二に、宗教は具体的に個々の問題について解答を与えることだけでない。この婦人は、「私はこのまま夫の家に留るべきでしょうか。或はすべての子供をつれて里に帰ったがいいでしょうか」と私に聞かれた。私の答えは次の通りである。

自分では右すべきか、左すべきかをきめかねるから、信ずるに足る人に相談してその指示をうけたいと思うことはよい。然し、宗教によって右か左かを決めて貰ったら、行

きづまりのない楽な道が見つかるだろうと思ってはいけない。人生には楽な生き方はない。右すれば右の悩み、左すれば左の苦しみが待っている。このことをつきつめて考えずに宗教によって都合のよい安易な道を見つけて貰おうと思うのは間違いである。右か左かを決めることも必要であるが、右へ進んでも左へ進んでも、苦悩を通じて生きぬいて行ける力を頂くことが大切である。そうでない限りどちらを選んでも行きつまる。宗教は右しても左しても生きられるような力を與えることが第一義の役目である。明日は晴れるか曇るか、それは測候所にきく外はない。晴れても曇っても明日の一日の仕事が出来る力を与える所に宗教の役目がある。明暗、順逆、人生行路は晴雨常なしであるが、雨もよし晴れもよしと力一杯生きて行ける所に宗教者の生活がある。

この無碍の道を身に頂くために宗教の門を叩くべきで、当面の具体的指示、左右の方向の決定だけをあわただしく求めるのは本末顚倒であろう。人事相談所と宗教家の役目の相違はここにある。人事相談は人生経験の豊富な親切な人であれば一通り出来る。然し無碍の一道を生き抜くには念佛無碍の白道を行く人による外はあるまい。

苦悩を抱いて涙ぐむ婦人と対座して、自分の人生経験の浅く、世俗的にも宗教的にもお役に立つことの少ないのを心から恥じた。お別れの時これだけを申し上げた。

奥さんの求められるものをお答え出来なかったのはすみません。しかし、どうかまたお気がむいたらお出で下さい。宗教の救いは、一度ですぐわかるような簡単なことではありますまい。長い間の無明の闇の照破されるまでには倦ますたゆまず聞法して下さい、自分のはからいでなく如来のみ手から与えて下さるのですから、私共は『聞』の一路の外ありません。

考え方の間違いも、正しい心の持ち方も、お育ての光明に照されて自然にわかってまいりましょう。目前の問題を自分の思うように急に解決しようとあせらずに、苦しむ時は苦しみながら、思い惑う時は惑いながら、聞法しましょう。闇の中から、何時しかあけぼのを迎え、ほほえんで人生を見直す日がきっと来ましょう。

復雑な人生ですね。生きることは容易ではありませんね。然し仏様のふところ住いの身となれば、同じ苦悩の婆婆ながら、又生きて行く格別の味も出ましょう。道は足許にあります。あまり切迫して当面の問題の中に首をつきこんで眼がまっくらにならぬように、かく悶え、乱れ苦しんで生きて行く自分その者をお光によって照して頂きましょう。そして、なくってはならぬお救いの力強い御手を仰ぎましょう。

〔畢竟依二巻四十五頁〕

念仏詩抄

木村無相

地獄の釜底

長松曰く
〃わたしは一生
地獄の釜底で
聴聞がしてゆきたい〃

地獄の釜底
わたしの居どころ
ミダ願心の聞きどころ
地獄でなくては
ミダにはあえぬ
地獄でホトケと
言うからは——
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

深く信じて

親鸞聖人・末灯鈔に
〃彌陀の本願と申すは
名号を称えん者をば
極楽へ迎えんと
誓わせたまいたるを
深く信じて称うるが
めでたきことにて候
なり——〃

〃深く〃というは
そのままのこと
凡夫そのまま

仰せそのまま
ナムアミダブツ
ナムアミダブツと
み心もろつて
称うるなり

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

わたしのもの

伏明師お歌に
〃親のもの
子のものなりと
聞くからは
彌陀の功徳は
わが功徳なり〃

ナムアミダブツは
如来の功徳
ナムアミダブツは
わたしのもの

わたしがいただく
ほかはない

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

本腹（ほんぷく）

播州の老婆曰く
〃もうこのわたしは
どうして見ても助か
らぬ
生れながらのメクラ
であったと
今度は本腹させても
らいました—〃

親鸞聖人御和讃に
〃煩悩に眼さえられて
摂取の光明見ざれども
大悲ものうきことなくて
常にわが身を照らすなり〃

メクラをメクラと
知らすなり――
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

この心を

霊城師仰せに
〃地獄と聞いても
なんともない、
極楽と聞いても
なんともない
この
なんともない心を
助けるぞと
仰せられる――〃

なんともない心
わたしの自性――
わたしでシマツの
つかぬこの心を
助けるぞと
仰せられる――
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

マチガイ

あるひと曰く
〃ちよっとでも
仏法の水に
つかっていると
思ったら
マチガイじや〃

聞くときだけで、
何にも心配は
いりませぬ
ただ
このままで
このままで――

めぐまれた尊いいのち

花田正夫

最近、生命の尊厳ということを色々の人が、それぞれの立場から提唱している。これというのも、人命の軽視される傾向がいたる所に見られるにつけて、改めて生命の尊厳が叫ばれてきたのであろう。

この時「一切衆生ことごとく仏性を有す」と教えられる釈尊を憶う。これは三十五歳で成道された釈尊が、一切の衆生をみそなわして、

「奇なるかな、奇なるかな、一切衆生は一大蓮花池のごとし。或は蕾はかたく水中深く蔵し、或はふくらんで水上に浮かべ、或はすでに紅白の色を見せて開花しょうとしている。」

と。これがおさとりの慧眼にうつる衆生の真相である。しかし私共は煩悩に障えられて智眼のない身とて、判断が不確かなうえに、愛憎は交錯し、疑心暗鬼のあさましさしか感じられない、ただ高いさとりを身につけた大菩薩だけがほのかに佛を見ることが出来ると云われている。

さて釈尊は、一切の人類のもつ尊いいのちを見出されて、仏性の蕾をはぐくみそだてられ、それぞれに、秋の七草が山や野を飾るように、美事な開花を願われて、種々に善巧方便の御手をさしのべて下さったのである。その有様はソクラテスが「人々は貴い智慧を内蔵している。自分はその生れ出るのをたすける助産婦の役をしている」と云って好んで青年と会話した故実に通じるものがある。

法華経に、釈尊の前生の身として常不軽菩薩物語がある。この菩薩は、あらゆる有縁の人々に近づいて「あなたも道を修して成仏される人！」と礼拝した。聞く人の中に、杖木や瓦石をもって、ののしりいかることがあってもこれによくたえて、難を避けて遠くからなおこの言葉をくりかえし続けて成道された、とある。

華厳経に釈尊の求道の象徴として善財童子物語がある。最初に仏智の権化の文殊菩薩の徳光をうけて、童子は、「私は迷いを城とし、高慢の垣をめぐらし、愚痴に覆わ

れ、煩悩さかんに、悪魔を主君と奉え、疑いの闇に迷うている。垢れなき世の燈明の菩薩よ、願わくば正しき道を示して導きたまえ」

と懇請している。やがて五十三の善知識を歴訪し始めるが、その中には山の仙人や、船人や、童子、医師、更にバラモンの僧、或は遊女、更に暴君らしき人、又は夜天と称するものやら、お妃クイ女、お母堂マヤ夫人が終りに近く知識とあらわれている。時には童子の勇猛心も、これはと思われる形相の知識にたじろぐこともあったが、その都度に文殊の励ましをうけている。このようにして成仏の大道がひらけているが、童子は始終合掌聞法の姿である。

又「三界は皆わが有なり、三界の衆生はわが子なり」とも「慈眼もて衆生を視そなわし、平等にして一子の如し」とも、更に「慈悲随遂して犢子の如し」とも、経典には示されている。

このように菩薩から合掌せられ、釈尊から護念されて、仏弟子達は、それぞれの持味を全分に発揮して、青色には青光、赤色には赤光、白色には白光、黄色には黄光を放って、美事に仏性が開花している。一句の法文も覚えられぬ愚者ハントクも、知恵第一の舎利弗も、五逆の阿闍世も、高徳の迦葉も、愛欲の葛藤に沈む蓮花色も、貞淑の誉高い勝鬘も、仁政のビンバレヤラ王も、肥汲人夫の尼提も、男女貴賤、智愚善悪、老少病健のへだてなく、みな等しく開花してその特長を発揮している。しかも二千五百余年の歴史をこえた現在も、仏法の流布するところに、時の流れに消されず、国境の障りにさまたげられず、人々の上に生き生きと伝承されて、信念の花が開いている。

以上のように、釈尊に護念せられ、諸菩薩方に合掌される尊いいのちを私共はここでしっかりとかえりみたいのである。相対差別の知恵しかない凡夫の判断は、時代によって変り、国境を異にすると転じる。唯眼前のことばかりに明け暮れる者の分別は浮き雲に等しいが、私共の心も言葉も及ばない大聖釈尊の金句には不滅不動の尊厳さがある。

このように仏や菩薩に見出された尊いいのちを頂いているのであるが、この仏性の開顕への道の扉が開けてこそ、人間に生れた素裸のままを喜ぶことが出来るのである。

この道に、現在二つの流れがある。聖道と浄土の門である。聖道門は、生活をととのえ、心をしずめ、智慧を磨いて、生死の苦海を解脱する道であり、浄土門とは生死のはてしのない大海を、弥陀仏の本願の船に乗托して、光明の彼岸に到達する道である。

さて、そのいずれを選ぶかは、その道の善悪、優劣によるのでなく、自分の能力の如何にかかっている。西田幾多郎博士が「東西古今に無数の哲学者が夫々の道を説かれて

いるが、一番大切なことは、どの哲学説が最も自分に適応するかを見出しそれをきわめることである」と云われた。源信僧都は「天台・真言の教法は其文一に非ず、事理の業因は、その行これ多し。利智精進の人は未だ難しとなさず。予が如き頑魯の者あにあえてせんや」と云われて浄土念仏門に帰していられるのは、私共への大きな指針である。

ところが世間には「自分は仏教とキリスト教のよいところをとって自分の教としている」と言う知識人もある。これは宗教の傍観者の言うことである。実際に今東京で親が重態となると、空路か、陸路か、列車か、バスか、どれか一つを急いで選ばねばならぬ、それらのよいところを採って行くなどは空論である。

私は初め無智なところから、手当り次第、尠くとも千年以上人類を照し続けている教を読みはじめた。ところが「我も人なり、彼も人なり」と意気ごんで出発したもののいざ実行となると、あれも落第、これも不可能となって、とうとう闇の砂漠を迷いさまようて、当時の日記に「野犬が食物を漁って芥溜をあさり歩くのが現今の私の生活であるが、何時まで続くことであろうか」と誌している。

こうした私が、篤信な伯父と、よき師にめぐり会って、歎異抄を教えられ、親鸞聖人に導かれるようになった。

「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」

「愚禿の心は、内は愚にして外は賢なり」

と、智目なく、行足のない愚悪の身を慚愧していられるのに驚かされた。そしてその一語一語は、その実感の浅深、強弱はあるにしても、私のありのままを云いあてられていたのである。

更に、その聖人は、何処に光明を見出されているのかと心をこらして読み続けると、

「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず、ただ信心を要とすと知るべし。その故は罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします云々」

「煩悩具足のわれらはいずれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまいて願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり」

「佛かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりとしられて、いよいよ頼もしくおぼゆるなり」

等々。こうした愚悪の身、誰からも捨ててかえりみられぬ身を、弥陀一仏がことに憐みたまうて、大海が濁水を容れて一味に浄化するように、大悲の大願海におさめたまうて罪障を功徳の潮に転じて下さると知らされたのである。

『罪障功徳の体となる　こおりとみずのごとくにて
こおりおおきにみずおおし　障りおおきに徳おおし。
名号不思議の海水は　逆謗の屍骸もとどまらず
衆悪の万川帰しぬれば　功徳のうしおに一味なり。
尽十方無碍光の　大悲大願の海水に
煩悩の衆流帰しぬれば　智慧のうしおに一味なり。」

とは、曇鸞大師と共に、聖人が、仏願の生起本来を聞信せられた満腔の随喜讃仰の声である。

かくて、私のために開かれている浄土の大道を聞信させて頂いたのである。かえりみるのに、自分の顔が自分の眼で見えぬように、自分の姿を自分で知り得ないのである。そこに無数に掲げられた教のどれが私に相応しているかを知る力もなく、思いつきのままに右往左往して、何処にも歎きをくりかえしたのである。こうした私が聖人の仰せを鏡として、自分の智目、行足の無いことを知らされ、その者を特に悲憫したまう大悲心に浴しはじめたのである。

この道は、易往であると釈尊が教えられるが、同時に難信と説かれ、又「易往にして無人」とまで誡められる。その離しさはもとより私共の邪見と憍慢によるが、それを具体的に云うと、一つには自己の正体を自分で知ることが出来ないこと。あだかも夢中夢を知らず、狂人に病識がないように、自分の重病に気づかぬから医薬を求めようとせず、朝から晩まで煩悩の奴隷となって、求道心がおこらぬためで、徒らに暮らし、徒らに明かして老いの白髪となるのである。

今一つは、絶体の大道には相対虚仮の身では到達出来ない。ひとえに絶対真実の本願力のひとり仂きによる外はない。トルストイが「太陽を探すのに燈火は無用である。よしんばそうして見つかったとしても、それは光も熱もない偽物である。太陽は太陽の放つ光で自体をあらわす」とたとえて真実のもつ自主性と自動性を特筆している。

故に大乗相応の日本に、幸によき人、よき教、よき御縁が恵まれているけれど、それをそれと知り得ないで、空しくすごすのである。それだから、仏法にあうた喜びを「盲亀が浮木にあう如し」とも「点滴岩をも穿つ」と云われるのである。かって或人が、弥陀仏のご本願を釈迦一仏がお説き下されば十分なのに、どうして経典には、六方の無数の諸仏が、同じことを繰り返しまき返し証誡されるのであろうかと不審がられたことがある。この人は智的な理解にとどまる人であって、身体で仏法を頂くことに気付かぬ人である。私共の自性は強剛難化であって、教えをはねかえしてすなおに身にうけがたい。それだから入れかわり、立ちかわり、十方諸仏、諸菩薩と現れて、大悲倦むことなく証誡して下さるのである。

「十方恒沙の諸仏は　極難信ののりをとき
五濁悪世のためにとて　証誡護念せしめたり」

これを身近かなことになぞらえると〃お母さん〃と幼児が母を呼び始める前に、母は〃お母さんが、お母さんが〃と昼となく夜となく名告り続けて下さった念力た催されているのである。さて〃お母さん〃と母が、子の呼ぶべき名で名のるのは、子の身になりきった親心の自然の発露でそこに同じ一つの呼び名で母と子の心が通うのである。〃南無阿弥陀仏〃も同様に、衆生の身になりきって下さって、衆生がお呼びすべき御名をもって、名告り出て下さるので、絶対真実の仏心と相対虚仮の凡心との交流はこの名号一つにかかっている。

縦令一生造悪の　衆生引接のためにとて
称我名字と願じつつ　若不生者とちかいたり

わが名を呼べ、その者を浄土に生れしめなければ、自分も仏とはならないとお誓い下さるのである。世に色々の名号があるけれど、こうした身を捨てられたお誓いのあるのは念仏一つである。このお誓願のたのもしさ一つで、煩悩具足、一生造悪の身も安心して念仏成仏の無碍道をたどらせて頂けるのである。

おもえば不思議と申す外はない。是非善悪を知る力もなく、身びいきな心に防げられて自分自身を知ることも出来ず、従って真実の道を求める心もおこらず、ただ煩悩の奴隷となってはてしのない生死の苦海を流転せねばならぬのに、幸にも釈迦弥陀二尊の善巧にはぐくまれて念仏成仏させて頂けるとは、まことに恵まれた尊いいのちであったと十方に合掌せずに居られないのである。

源信僧都は横川法語（自画像の偈）に「それ人間に生れたること大きなるよろこびなり、云々。ゆえに本願にあうことをよろこぶべし」と言われている。本願を聞信して、そこに開ける信心の知慧によって、さとりへの扉が開かれ、人間に生れた素裸のなりをよろこぶ、無上のよろこびを御自身の上でおのべ下さって、妄念のかたまりの身も、それを機縁として、泥田に蓮花の咲くよろこびがあるぞとおすすめ下さるのである。

電車の線路も完成し、車体も整備されても、電流が通じないと動かないように、理屈でいくら生命の尊厳を聞かされても、本願力が加わらないと、宝の持ち腐りとなる。本願力のはたらくところに、人界受生のよろこびは自然に感得させて頂けるのである。本(もと)立ては末自ら通る道理で、本末を転倒してはならぬと知らされる。

あとがき

〈御案内〉
時＝十月三十一日(日曜)午後一時より
所＝京都市左京区山田開町、浄住寺
京都駅より苔寺行きバス終点下車
新京阪、桂乗り換え、上桂下車。
京都一道会

秋色も濃くなりました。草も木もみのり、紅葉に飾られますにつけ、私共の信の旅をはげまされ、よく聞け、身につけよと声なき声がしきりであります。

完月は近角先生の、内的制裁力の養成を頂き、本月は根底的改造の指示を頂きました。敗戦以来、日本人の心の空洞化が続き、金権と暴力の孤狸が空家に自由に出入りする有様、蓮如上人の「仏法を主とし、世間を客人とせよ」のきびしいおすすめを一人一人に頂きたいことであります。客人にせよとは決して軽視してもよいというのでなく、お客は大切にせねばならぬのが理の当然であります、ただ心に主を持てば、孤狸は自然におさまるのであります。

池山先生の追慕の会、京都一道会が近づきますにつけ、先生が信のおよろこびの上から、世間に呼びかけられました最初の著書「絶対他力と体験」から、苦悩の人生の姿を誌されたものを掲げました。「残水の小魚が、右にも左にも行き詰りながら、やがて水が渇いて死滅する」に等しい身が、涸渇を知らぬ大河に救いあげられますことは、次回に頂きます。

山本晋道師の一文は「自分が問題で自分の問題でない」点を対話の中から教えられます。自分が問題になった人が歎異抄を読めば、四方八方から救いの手のさしのべられていることを知らされましょう。

木村さんの「念仏詩抄」がこの秋第四版を重版されます由で、およろこび申しております。お念仏を縦糸とした数珠であります。京都市下京区花屋町西洞院の永田文昌堂が発行所です。

恵まれた尊いいのちの拙文は、人間が自分で価値づけしたのでなく、仏陀の御目において見出された尊さで、しかもそのいのちを慈育して下さって、成仏の道を開いて下さることを改めて讃仰申し、慈恩を謝しまつりました。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜、午后一時半、一道会例会。
市バス、新郊通り一丁目下車。
東入る三筋目左入る。
地下鉄、新瑞橋下車。
近鉄呼続下車。
又は本笠寺下車、市バス乗りつぎ。

○ 毎月二十四日、午前午后。
昭和区小桜町、教西寺法話会。
市バス、御器所通り下車、又は北山下車

定価　半年　七〇〇円（送共）
一年　一四〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駅上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駅上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光　第二十八巻　第十号　昭和五十一年十月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可